

学生が文章教育に望むこと

——「論述・作文」履修生の小論文に見る文章教育の課題——

山崎 哲永

1. はじめに

本稿は、1999年度前期講義の第2回目に学生が執筆した小論文に基づいて筆者が行った口頭発表資料*1に加筆したものである。

1999年において、本学では全学部の学生が履修できる「論述・作文」(半期各2単位)を昼間部に16コマ、夜間部に3コマの合計19コマ開講し、7名の担当者によって講義を行った。各クラスには40名の受講制限を設け、例年、年度始めの抽選によって履修者を決定する。履修する学生の大半は1年生であり、少数ながら2、3年生も履修する。各担当者は、学生が論理的な文章を書く技術を習得できるよう、前期は短めの小論文の書き方、後期は長めのレポートや論文作成の手順を指導するという共通の目標に沿う範囲において、各自工夫して講義内容を自由に組み立てている(1999年度前期の筆者のシラバスは本稿末を参照)。なお、今回の小報告では、小論文に含まれている情報を網羅的に扱えていないことをあらかじめお断りしておく。

当該年度における筆者の担当は昼間部2クラス、夜間部1クラスである。本稿で扱った資料は、昼間部の金曜日1講目1クラス分の学生が書いた小論文である。履修者は39名で、その内訳は商学部12名、法学部7名、人文学部人間科学科10名(うち1名は留学生)、人文学部英語英米文学科2名、社会情報学部2名(うち1名は執筆当日に欠席)、経済学部5名である。さらに、1年次に単位を取得し

た人文学部人間科学科の3年生が1名、来年度の卒論に役立てるためにと復習を希望したため出席を認めた。

2. 課題の概要

初回ガイダンスに続いて、第2回の講義で課した課題の指示内容は次の通りである。

題名：「私の受けた文章教育」

内容：次の4点を必ず含めてください。

1. これまで、文章の書き方についてどのようなことを教わってきたか、あるいは自分でどのような勉強をしてきたか(誰にも教わったことはない、勉強したことはない、という場合を含む)
2. 1で述べたことがらは、自分にとってどのような点が益になった、あるいは役立たなかったと考えているか。
3. それはなぜか。
4. 今後は、文章の書き方についてどのようなことを学びたいか(授業への要望を含む)

字数：1200字(400字詰め原稿用紙で3枚)以内

書式：1行目にタイトル、2行目に学生番号を氏名、3行目から本文、ページ番号を振る(2枚目以降にも学生番号と氏名を書くこと。欄外でよい。)

上記のように、学生には、タイトル(「私の受けた文章教育」と内容に関する指示だけを与え、90分の時間内に自由に書いてもらっ

た。ただ、記述する内容と構成に関する難易度を下げるため、上記のように多少のコントロールを加えた。文末の選択（常体／敬体）や構成は各自の希望に任せた。

3. 学生は何を学んできたか

学生が文章教育として挙げているものは主として、①原稿用紙の使い方や基本的な表記法、②小・中学校で行事作文や読書感想文を書いたこと、③大学入試のための小論文がある。①に言及していた学生は最も多く15名である。

②について述べていたのは11名である。ただ「書いた」という事実に触れているだけのものが大半である。例えば次のように、指導する側からのフィードバックが無かった場合が見られる。「提出して評価して返すという事はなくただ出して終わり。これでは書く方もおもしろくない。ただ出せばいいという事だけでは自分の書いた文章が良いのか、自分の文章の表現はどうなのかが全然わからなかった(商学部2年)」、「具体的に書き方を教わったり、自分の書いた文章を先生に直してもらったりしていたわけでもないで、できあがった文章がいいのか悪いのかが全くわからない(英語英米2年)」。あるいは、フィードバックがあったとしてもその意図がわからず困惑する学生の姿も垣間見える。例えば、「先生に『お前の作文には中身がない』と言われたことがあった。でも、自分なりに書いたわけだし、どこにどう中身を入れていいものなのかわからないのでどうしようもない(商学部1年)」、「してはいけないことを教えてくれてもどの様に書けばいいのかは言ってくれなかった(法学部1年)」、「感じた通り(に書くように)ということとはあまり役に立ったとは思わない。素直に書いても先生から『こんなことしか感じないの』と何度も言われたから。それで、文章を書き直すときに、自分の感じたことではなく先生が喜びそうな文章を

書いた方が良かったと感じた(経済1年)」などがある。

さらに、書き方についての具体的な指導がなかったため、「ただ枚数をこなせばよいと思っていた。ひたすら起こった出来事を事細かく書くだけ。先生は指摘することもなく、私はこれで良いと思いつけた。先生が書いてくれた感想は嬉しいものであったが作文を書くことについて勉強にならなかったかもしれない(法学部3年)」という記述もあり、いわば「書きっぱなし」の状態に置かれた経験が読み取れる。

小学校の段階で文章の構成について学んだと述べている学生は少ない。最も具体的な例は以下のものである。「文章を書く前におこった出来事や思ったこと考えたことなどを6つぐらいのグループに分けて整理をして書くということ(経済1年)」、「過程の段落とまとめの段落を書く。最初に書きたいことを箇条書きで書き、それから類似しているものをまとめて段落にしていく(経済1年)」。

この他、小学校での指導について、「会話を入れる(商学部1年)」、「文章の中に自分の感想を入れるのが大切だと習ったので、小学校の作文は『私は～と思いました』ばかりであった(商学部1年)」という記述がある。これらは小学校の作文の目的には合っているが、論理的な文章の構成に役立つものではない。後者の学生は、「私は～と思います」という書き方が「中学に入ると全く通用しなくなった」と述べている。

③の、大学入試のための小論文を挙げている学生は11名いる(うち1名は、作文との区別がわからないと述べている)。例えば、「文章構成の作り方や、自分の意見をどこでどう入れるかなど(人間1年)」。ある学生は参考書を買って自分で勉強したことがらとして、「まず、あるテーマを自分で提示して、そのテーマについて自分は賛成か反対かの立場を明確にし、なぜ反対なのか、賛成なのかを論

述していく作業が小論文の書き方（であると学んだ）（人間1年）。小学校や中学校での作文を文章教育と捉らえていない学生でも、高校の小論文からは文章教育であると感じているようであった。

一方、文章教育は全く受けていない、と述べている学生もいる。「先生などからきちんと教わった記憶はない（法学部3年）」、「誰にも作文の書き方を学ぶ機会がなかった（経済学部1年）」のように、学校で学んだことを文章教育と受け止めていないことを言明している学生が12名いた。その他にも、ある学生は原稿用紙の使い方について、「これは常識だと言われてしまえば、僕は文章教育を全く受けていないのと同じである（英語英米2年）」という感想を述べている。

これらの学生には、「本を読んで」「自分で小論文の本を買って」勉強したという学生もいれば、「自分で勉強することはなかった」という学生もいる。

文章について自分で勉強したという学生の勉強法には、小論文の自学自習、読書、投稿・ファンレター、好きなコラムニストを見習うなどがある。

このように、学生は、原稿用紙の使い方や表記など、ごく基本的なことがらは教わっている一方で、文章の構成等については小・中学校の間に指導を受けた学生が少なく、一部の学生が小論文を学ぶ際に勉強した経験があるのみである。全体に、個別の指導を受ける機会が少なく、具体的に何をどうすれば達意の文章になるかが分からないでいる様子である。

4. 文章教育は何にどう役立ってきたか

これまで文章について学んだことがらが役立ったと学生が考える分野は、大きく分けて①文章作成そのもの、②思考力を培ったり知識を蓄えたりすること、③精神生活の充実や精神衛生の3つに分けられる。

①については、「作文等の宿題が出た時、とても役に立った。漢字の送りがな等は友人に手紙を書いたりする時、特に役に立った（法学部1年）」、「中学での定期テスト、高校入試、大学入試（法学部1年）」、「これら（小学生の時に教わった作文と、高校の小論文の指導）のおかげでこの大学に入れた（法学部1年）」、「書く前に内容をグループ分けして整理して書くことを教わってから、頭の中でごちゃごちゃ考えていることを作文用紙にそのまま羅列していくのではなく、出来事を順序だてて書くようになり、文章を書くことがずいぶん楽になった。（経済1年）」などがある。

②については、文章を書き慣れることで「一つの間に対して2つの答えしか出なかったのに対して、今では3つ、4つの答えは出せるようになった（経済1年）」、「（小論文の練習の副産物として）新聞を読むようになった（商学部1年）」、「教科書の付録としてついてくる、豆知識や現在問題になっていることなどに気付いて自分なりに考えた。自分の中でまじめな問題にもよく目を向けたり深く考えたりするようになった。新聞やニュースを毎朝のように見て、それについて父母と深く話し合うこともできるようになった。自分の浅い考え方が浮き彫りになり恥かしい思いをした反面、新しい考え方やすじ道のたったものの考え方を知った。感情だけで判断するのではなく、深いところまで知りたいと思い、そうやって考えるようになったと思う（商学部1年）」などが代表的な記述である。

③については、「ストレスのはけ口（商学部2年）」、「嫌なことがあっても紙の上にはきだせるようになったし、感謝の気持ちが前より伝わるようになった（人間1年）」のように、書くことが感情や思考の整理になることに気付いている学生がいる。さらに、口ではうまく言えないことも、後から考えを整理して書けば言いたいことが充分「言える」という学生もいた。

一方、役立たなかったと述べている学生には、①ただ書いて出すだけで、どこがいけないのかわからない②小学校以来、書く機会がない、③学んでいなかったで、大学に入ってから必要になり不利益を被っている、という学生がいる。

文章教育を受けたことが、あるいは自分で文章の書き方を学んだことが役立ったと述べている学生は、成功体験があるか、個別指導によって添削を受けているなどの十分なフィードバックを受けている様子が見て取れる。次の様な例がある。「読書感想文を書いて賞をもらったことが(中略)私に自信をくれた(英語英米3年)」、「学院大の論文の試験の1ヵ月位前^(ママ)から、担任の先生と一対一でびしりと言語の使い方や段落の分け方、文章での自己表現の仕方、新聞の社説の部分をまとめることや他の大学の論文試験を書くなど、文章の書き方を一から全て教わった。(中略)勉強していくにつれて文章を書くことが少し好きになり、以前の私とくらべると少しは(書く事が)上手になった気がする。(中略)高校の先生は文章をきちんと読んでくれるし、誤った箇所は全て直してくれた(商学部1年)」。この他、書けば書くほど好きになったという学生が散見される。

文章の書き方を学ばなかったことで損をしたという学生が数名いる反面、書き方を学ばなかったことに良い面があると答えた学生が2名いた。一人は、「(話し言葉と同じくらい、書き言葉としての)文章は大切なんだということ(に気づいた)。文章の書き方を教わっていたら、ぼくは逆に今もその大事さに気づかずに生活していたと思う(経済1年)」と述べている。もう一人は、「下手に人から作文の書き方を教わるよりも、(中略)自分自身の考え方や個性を全面に押し出すことができるから味があって面白い文になるかも知れない(経済1年)」と述べた後、続けて、公の場には通用しないと書き添えている。

後者の意見は、文章の書き方を教わることは個性が剥奪されることだという気持ちの現れのように思われる。少し方向は異なるが、「今後も私のこの文章の書き方は変えないつもりである。なぜなら、この書き方が自分の自然の書き方であり、正しい書き方であると思っているからである(商学部1年)」という考えを表す学生もある。同様の主旨の意見や質問は毎年学生から提示される。これを見越して講義の初回に、「私は皆の意見には手を加えず、意見を最も効果的に伝達するための方法を伝授するだけである」と、教師の役割について説明し安心してもらうようにしている。同時に、論理性に欠ける文章の場合、学生の考えを鼓舞するための質問や反論を添削時に書くことも了解してもらっている。さらに、文章の個性はテーマの選択と論じ方で出せる、という話をすると一応は納得する様である。

5. 学生は講義に何を期待しているのか

学生の記述は、①講義に何を期待するかと、②講義を通して自分がどう進歩したいかに分かれる。

前者は大別すると、a. 講義内容、b. 講義運営の方法に分けられる。内容については、これまで基本的なことがらを学んできたと言ってはいるものの、やはりごく基本的なことから教えてほしいという学生がかなりいる。同時に、卒論・レポートの書き方を学ぶために履修したと述べる学生も多く、大学の必要を意識していることがわかる。1年生の場合、大学生活を経験する前に必要を見越して履修を決めるのに対し、2年生、3年生は実際の必要を実感してきたために履修を決めるようである。ある2年生は次のように書いている。「大学に入るまで、文章の書き方を教わらなくても困ることは無かったが、大学に入って文章の書き方について知らないと損をすることが多いことに気付いた。ここでは

文章を書けないと、意味が無い。答えが一つではないので、(中略)自分自身の考えが必要になる(商学部2年)。

講義の運営については、「提出までの期間を長くしてほしい」「^(ママ)優しく解りやすい授業にしてほしい」のほか、「意見の分かれるテーマについて書き、討論したい」という要望もあった。

②の、講義を通して自分がどう進歩したいかについては、「苦手意識を克服したい」が圧倒的に多い。一つ例を挙げる。「文章の書き方に対する意識を少しでも変えることができれば良いと考えている。(中略)(苦手で嫌いだという)先入観をまず取り除きたい(商学部2年)」。苦手なので書く機会を避けてきたため、練習の機会を逸してますます苦手になっていくという悪循環を断ち切りたいとの思いが見て取れる文章もいくつかあった。もっとも、筆者のシラバスに掲載した履修の目安に「文章を書く事が好きだが苦手」な人に勧められるという一節があるため、特に苦手意識の強い学生が集まった可能性もある。その一方で、「文章に書き慣れたことで文章に対する苦手意識がなくな(った)(法学部1年)」のように、大学入学までに苦手意識を克服した学生も、少数ながら存在する*2。

他には、長く書けるようになりたい、簡潔に書けるようになりたい、表現力を少しでも高めたい、文章への理解をもっと深めたい、などがある。

他方、実利的なものには言及せず、むしろ書くことによる思考の整理や理性的に考える力を得ることなど、精神生活の充実を期待する学生も数名見られる。

6. 文章教育の位置付けに関する問題

小学校から高等学校にかけての教育の中では、文章教育があまり重要視されていないとする学生もある。この点については実際に調査をしていないため、例を挙げるに留める*3。

・「これは僕が卒業した学校に限ることなのかもしれないが、大学に入るまでに、しっかりとした文章教育がないというのはちょっとおかしいなというのを、今になって思い始めた。(英語英米2年)」(毎年度末に行うアンケートに、「こうした教育がもっと早く行われたいのは残念だ」という意見が散見される。)

・「小さい頃からの文章教育は必要だと思う。現代の日本人には、きちんとした文章を書けないという人が多いと思う。(中略)文章教育をちゃんと受けていないからである(商学部1年)」

7. まとめと展望

学生は、考えたことを並べただけでは達意の文章にならないことを知っている。それは、高校までに指摘されて理解していたり、書いた内容を誤解されたりといった経験に由来するものもあれば、指摘を受けてはいないものの、大学に入学してから自分で実感した場合もある。

学生が論理的な文章を書く技術を知らずに入学して来る背景には、上記で垣間見たように、日本の初等・中等教育において、論理性よりむしろ「感じたまま」を書くということが好まれるという事情がある*4。したがって、特に機会を捉えて練習してきたので無い限り、学生が論理的なレポートを書けなくても不思議はない。その点について学生に事を分けて説明するのは、学生に自信を失わせないために必要な段階である。これまで書いてきた文章と、これから書く必要のある文章は、目的が異なるのだということを理解すれば、その方法も異なることもおのずと理解できよう。

さきに見た学生の文章には、指導されることへの心理的な抵抗が見て取れるものもあった。しかしそれでも「論述・作文」を履修する気になったところに注意を向けたい。定員

を越えた履修希望者が集まると知りながら抽選に参加したのは、これまで自己流で身につけた以上の何かが得られると期待したからこそであるに違いない。文章作成の技術は学べるものであるということを学生に繰り返し説明しながら、段階を踏んで学生の必要を満たすことに努めたい。

今後は、初等・中等教育における文章指導の実際について具体的な情報を得て、その上に、大学における文章教育の意義と位置づけを行い、同時に、具体的手法の開発に務めたい。

注

*1 本稿は、北海道方言研究会第134回例会(1999年9月19日、札幌市北区民センター)および札幌学院大学社会情報学部第55回研究会「社会情報談話会」(1999年12月22日、札幌学院大学)で用いた資料に加筆したものである。文章教育についての経験や考えを提供し、情報を公開することを承諾してくれた履修生諸君に心から感謝する。さらに、席上で賜ったすべてのご意見・ご感想に心から感謝する。今後の研究に反映させたい。

*2 大学志願者数と入学者数が接近するにつれ、文章を書くことが苦手である、あるいは文章作成の経験に乏しい学生は増えるものと思われる。したがって、大学の講義中で学生に自信を持たせ、進んで経験を積ませる工夫はますます必要の度合いを増すと思われる。このための具体的な実践例および可能な手法については稿を改めて論じたい。

*3 高等学校で国語を担当している教諭によれば、「受験指導に時間を取られる都市部の学校より

も、郡部の学校の方が文章指導ができる。さらに、普通科よりも工業・商業系の生徒の方がレポートで調査報告等をきちんとやっている傾向にある」(大鐘秀峰教諭、北海道国際情報高等学校、北海道方言研究会大134回例会質疑応答)。さらに、「国語表現法という科目自体はあるが、小論文指導には大変な労力がかかるので避けて通る学校もある。徹底的にやっている学校とそうでない学校の差が大きい。」(道場優教諭、札幌大谷高等学校、同)といった事情がある。

*4 この点について大鐘教諭は、論理性を身につけることが文章教育だと日本で言われ出したのは最近のことであると述べ、国際化にともなって日本でも接する機会が生じた言語中心主義は、欧米の「訴える一訴えられる」から出たものであるため、(論理性を重視した文章教育を受け入れるには)日本人の言語観の改変も迫られると説明している(北海道方言研究会第134回例会質疑応答、括弧内は筆者)。これに賛同した上で筆者は、論理的な文章に必要なものは、いわば「文化を離れた言語の用い方」ではないかという点を示した。文化を異にする者同士は共有する知識も前提も少ない。従って、効果的な情報のやりとりをするためには、必要なものと全てを言葉にし、順序立てて述べる必要がある。こうした、いわば無国籍の日本語を操る技術を身につけることが論理性を磨くことになると考える。この点については稿を改めて実証的に論じたい。

*5 2000年度より新版教科書(『読みやすく 考えて 調べて書く ― 小論文から卒論まで ―』)を使用。

〈資料〉『履修要項 1999 全学共通』p.206, 札幌学院大学

I 類	論述・作文A	2単位	前期	(1)(2) 山崎哲永
-----	--------	-----	----	-------------

履修上の 留意事項	1クラス40人の人数制限を行い事前の登録によって受講者を確定する。 なお、A・Bは通年履修が望ましく、その際は同一クラス番号で登録すること。
--------------	---

◆授業のねらい

この授業では、論理的な文章をふさわしい文体と構成で書くための基本的な技術を習得します。前期は、誤解を生む表現や誤用、文のねじれを注意深く避け、平易で簡潔な文章を書くことを目標にします。授業中、小論文等を随時書くので、大学指定の原稿用紙を毎回必ず持参して受講すること。

◆授業計画

前 期	<p>各課題を通じて、(1)文章の目的を分析して何が必要かを判断し、(2)判断した必要に即して考えを引き出し、(3)考えを言語化して文章にし、(4)文章に整った形を与えて読み手に誤解なく伝達するという手順を念頭におきます。</p> <p>講義部分</p> <p>原稿用紙の使い方等基礎的な知識の確認</p> <p>要約を通して構成を学ぶ</p> <p>目的に即した文体選び</p> <p>説明文</p> <p>ノートのとりかた</p> <p>図書館の利用法</p> <p>推敲のポイントなど</p> <p>実習部分</p> <p>要約課題、小論文を授業中に執筆・提出（年数回）</p>
--------	--

◆成績評価

課題への取り組み方と提出物の内容により総合的に評価し、定期試験は実施しません。3分の1以上欠席すると基本的に単位は認められないので注意のこと。私語厳禁。

昨年度履修生へのアンケートによれば、この授業は「文章を書くのは好きだが苦手であり、授業に真面目に出席して人の話を静かに聞ける人」には勧めることができ、逆に、勧められないのは「何事も要領が良く、物事が早いペースで進まないといライラする人」とのことです。履修の目安にしてください。

◆教科書・参考書

教科書：奥田・神成・本間・山崎『文章作成と日本語の基礎（仮題・改訂中）』（学術図書）*5

参考書：木下是雄『レポートの組み立て方』（筑摩書房）

木下 泉『ワープロ作文技術』（岩波書店）